



Title	和歌における「あけぼの」と「あかつき」の差違について : 定量的分析から
Author(s)	篠原, 美夏
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 8, p. 43-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92604
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和歌における「あけぼの」と「あかつき」の差違について

一定量的分析から

日本文学・日本語史学 博士前期課程 2 年

篠原 美夏

1. 研究の現状と課題

日本古典文学では、夜明け前～朝の時間帯を表す語として、「あかつき」「あけぼの」「あさぼらけ」「しのめ」「ありあけ」「あした」「つとめて」等、複数の語が用いられている。こういった類義語を正確に区別して解釈することは、日本古典文学作品の理解に必須のことである。しかし、現代とは異なる語感によって使い分けられていたであろう語を、その語自体を使わない現代人が正確に解釈することは簡単ではない。

上で挙げた語の中でも、「あかつき」と「あけぼの」は用例数が多く、幅広い時代の様々な歌集・散文作品で確認できる。これまで、「あかつき」と「あけぼの」の差違は何かという疑問に対して、主に性質の違いという観点から以下のような研究結果がある。

まず、視覚性と聴覚性の違いという点が挙げられる。『日本国語大辞典』「あけぼの」項では「時間的に重なる「あかつき」が聴覚に関わることが多いのに対して、視覚に関わった例が多い。」¹とする。吉海直人氏は『源氏物語』夕顔巻を取り上げ、「あかつき」の時間帯における聴覚情報の重要性について言及している²。「あけぼの」の視覚性についても、院政期頃までの和歌を検討した上野辰義氏が言及している³。

他にも、東望歩氏が「「あけぼの」の時間に見られるものは、刻一刻と明るさを取り戻していく空とそこに浮かぶ雲や霧なのである。」⁴と述べており、反対に『歌ことば歌枕大辞典』「あかつき」項では「露」「鳥獣の声」「梵鐘の音」「冬の天象」「月」（多くは有明月）、恋における「別れの悲しみ」「別れの予感」「別れの名残」が特徴的な景物として挙げられる⁵など、詠み込まれる景物に差違が存在することがわかる。「あけぼの」に関しては、『歌ことば歌枕大辞典』に「もっぱら春の例」が多いとある⁶ように、季節の偏りが見られるのも特徴的である。また、新古今期頃からは、「雪のあけぼの」を詠み込んだ冬の歌も増えた。

以上のように、代表的な用例を用いた質的な研究は充実しているものの、現存する膨大な量の用例全てを用いた量的研究は未だ行われていない。これらの先行研究が「あかつき」や「あけぼの」の語全体に適応できる結論であるのか、客観的に確認する必要がある。

¹ 『日本国語大辞典(第二版)』(2000-2002, 小学館)

² 吉海直人「『源氏物語』夕顔巻の「暁」」(2010, 『國學院雑誌』111(4), pp.17-27)

³ 上野辰義「「春はあけぼの」と「春のあけぼの」—枕草子第一段雑考—」(2001, 『京都語文』(8), pp.4-21)

⁴ 東望歩「『枕草子』初段考」(2020, 『文学・語学』(230), pp.75-87)

⁵ 項目執筆：三角洋一(久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(1999, 角川書店))

⁶ 同注 5

2. データ収集方法

『新編国歌大観』から「あけぼの」が含まれる歌(以下「歌群1」とする)と「あかつき」が含まれる歌(以下「歌群2」とする)を抽出した。範囲は、『新編国歌大観』の検索画面で「時代順」に並べ替えた際に、最後の勅撰集である『新続古今和歌集』までに含まれる全ての歌とした。ただし、同一歌が複数の歌集に含まれる場合は、うち一例のみを残した。分析対象歌数は歌群1が1239首、歌群2が1627首となった。この計2866首を、中古和文UniDicを解析用辞書として用いた「Web茶まめ」⁷によって形態素解析を行い、語彙素に分解した。この解析の誤りを発表者によって修正した上で、助詞と助動詞に区分されるものを除いた。語彙素の総数は2052である。

なお、「曙」「明ぼの」「あけぼの」など複数の表記があるものを、本研究では「あけぼの」で代表させる。「あかつき」に関しても同様である。

<和歌を対象とした理由>

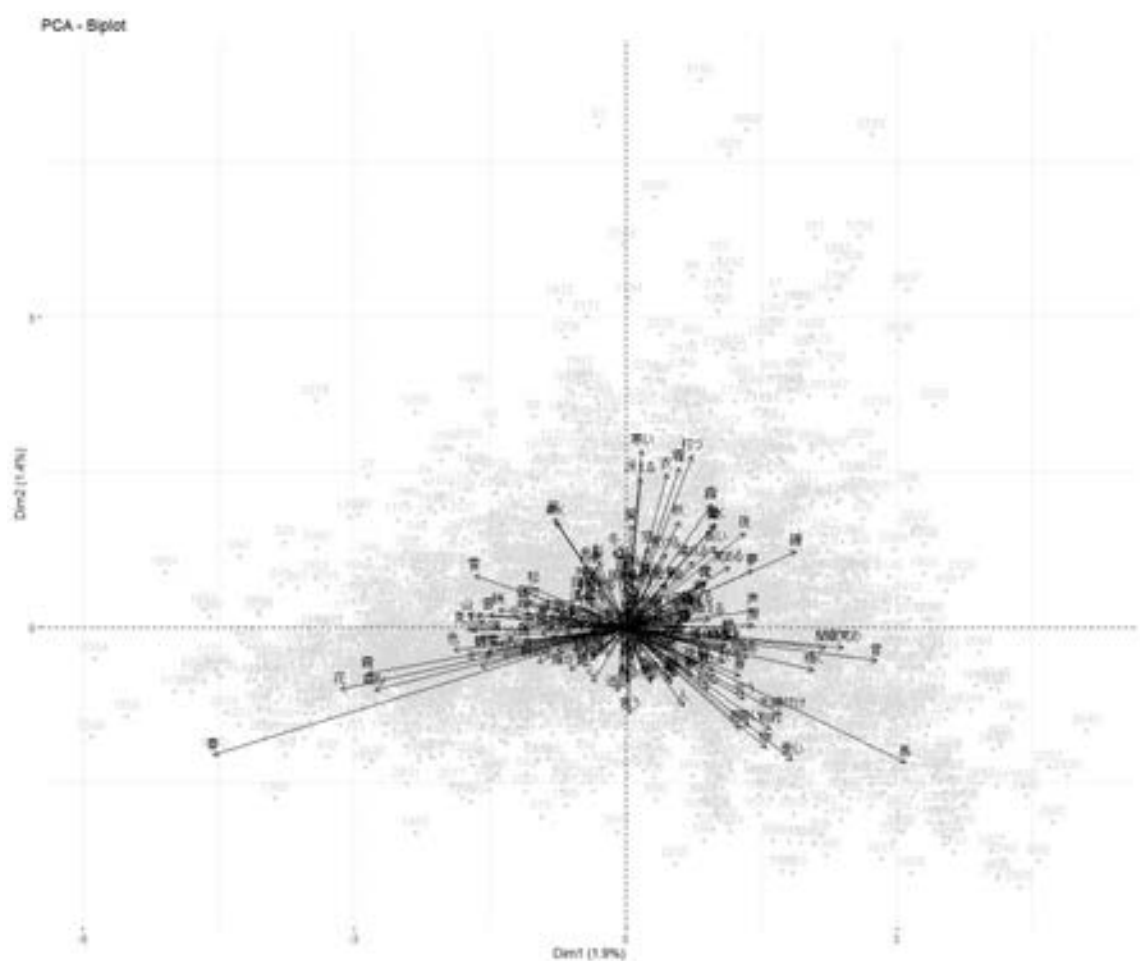
和歌は原則31文字(音韻)であるため、歌集や時代が異なっても均質な資料にできる上に、散文作品よりも本文異同の問題が生じにくい(小さい)。また、歌集としてまとまった数の和歌が現存するため、十分な量の調査データを揃えられる。散文作品は時代が下った写本しか現存しないものも多く、どの本文を調査データとして採用するか一概に決められない。また、文字数の制限がないため、無視できない大きな本文異同が発生している箇所がある。こういった事情から散文作品データベースの整備も遅れており、十分な量の分析用テキストを用意するだけでも多大な労力が必要となる。以上の理由から、今回の分析対象テキストは和歌に限定した。

3. 主成分分析

歌群1・2合わせて30例以上現れる178の語彙素のみを残し、歌群1を1、歌群2を0という二つの値を従属変数と設定してロジスティック回帰を実施した。ただし、独立変数には、主成分分析⁸の結果得られる各合成変数(主成分)上における数値を投入した。これは、独立変数の強い相関が生む、多重共線性等の不都合な状況を回避するためである。さらに固有値1.5以上の17個の主成分に対してロジスティック回帰を実行した。その結果では、サンプルサイズが大きいため、本質的な影響がなくともp値の小さい独立変数がある。このため、p値の小ささに加えて、効果量の値が十分に大きい主成分に限定する。今回は、最大の効果量を持つ第一主成分(-1.76)と、次に効果量の大きい第二主成分(-0.36)に注目して考察を進める。第一主成分と第二主成分のバイプロットを次に示す(黒の矢印：語彙素、グレーの数字：和歌)。

⁷ <https://chamame.ninjal.ac.jp/>

⁸ Rの{prcomp}パッケージ中の同名関数を利用した。



それぞれの合成指標において、主成分得点の高い項目を抜き出すと以下の通りである。

	春	花	霞	霞む	色	山	見える	雪
第一主成分	-0.33	-0.23	-0.21	-0.2	-0.14	-0.13	-0.12	-0.12

	鳥	音	寝覚め	聞く	鳴く	鐘	憂い	木綿付け	別れ	物	声	涙
第一主成分	0.22	0.2	0.17	0.16	0.15	0.14	0.13	0.12	0.12	0.11	0.1	0.1

	寒い	霜	衣	冴える	秋	嵐	窓	冬	更ける
第二主成分	0.24	0.22	0.21	0.2	0.14	0.14	0.11	0.1	0.1

第一主成分・第二主成分ともに推定値はマイナスであるため、この値がプラスの場合は 0 である歌群 2 に影響を及ぼし、マイナスの場合は 1 である歌群 1 に影響を及ぼす。

第一主成分のマイナス成分は、「春」「霞」「雪」や視覚情報である「見える」など歌群 1 で特徴的だと先行研究で指摘されていた語が上位を占めた。プラス成分では歌群 2 に特徴

的とされる「鳴く」「聞く」「声」「音」「鳥」「鐘」等の聴覚情報や、「憂い(形容詞)」「別れ」「涙」など「あかつき」における別れの悲しみに関係する語彙が見られた。こういった各歌群に特有の語彙素が第一主成分の両端にあることは、従来指摘されていた両語の特徴(差違)が用例全体に適用できることを示す。また、先行研究で指摘されていた視覚的な「あけぼの」と聴覚的な「あかつき」という対比は、用例全体を通して見られる傾向であると言える。

第一主成分と直行する第二主成分では、「秋」「冬」といった季節や、冬の寒々とした空気を表す「寒い」「冴える」、冬の景物である「霜」や冬支度の擣衣に関連する「衣」などが特徴的な語として抽出された。これらの語は第一主成分の影響がかなり少ないため、聴覚情報との関連は少ないものの歌群2に特徴的な語群であると言える。「あかつき」詠に冬の景物が詠まれることは先行研究で指摘されていたが、主成分分析により、鳥や鐘などの聴覚情報よりも関連度は低いものの「あかつき」に特徴的な語群であることを数値的に示すことができた。

また、裏を返すと、秋や冬の歌は歌群1には見られにくいとわかる。歌群1では主に冬の景物である「雪」の用例数は多いが、歌群1の冬歌における景物は「雪」に集中し、それ以外はあまり詠まれないことが推察される。

4. 結論

主成分分析を通して、従来の質的研究における結果と同様の現象を、量的研究によって客観的に証明できた。さらに、両歌群の冬の景物を比較して、「あけぼの」詠は「雪」という一つの景物に集中し、「あかつき」詠は冬の景物全般が聴覚情報や「別れ」の次に特徴的な歌材であるという新たな指摘ができた。

古典文学において、統計学的手法を用いた研究は、様々な固有の問題があるためあまり取り入れられてこなかったが、従来の結論と矛盾しない分析結果を取り出すことが可能であるとわかった。また、限られた用例に基づいた質的な研究の結果を、量的な研究によってより広い範囲でも適用できることも確認できた。適切にデータを処理することによって、古典文学研究においてもこのような手法を取り入れることは可能であり、その意義も十分にあると言えるだろう。

今後の課題として、より多角的に検討するために、この二語以外の類義語の調査もする必要がある。また、今回は解釈の容易な第二主成分までに限ったが、さらに細かい第三成分以降をつぶさに観察することで、定性的な研究では見出しづらかったような傾向が発見される可能性もある。加えて、本文データベースの整備や本文異同・係詞、年代判別など古典文学特有の問題への対応も今後の課題となるだろう。